

## 第一章 場

---

### 一章一節 二つの場 —— 「物質場」と「意識場」 ——

分別智のレベルで判断するならば、今、私たちが住んでいるこの世界は、明らかに性質の異なる二つの「場」から構成されているように思う。一つはこれまで本書で述べてきたような「意識の場」である。それは意識経験の最も純粹で根本的な特性である「知る」というはたらきが生じる場である。ただし、場と言っても、それは「x、y、z、t」といった座標で表されるような物理的な時空間を指しているわけではない。それはクオリア顕現の「舞台」となり、クオリアが生じる「ところ」であるので、便宜上、場という言葉を用いている。この場の中には、主観的な意識事象のすべてがある。色形、匂い、思考、意志、欲望、愛情、そして、「私」という自己の感覚……。意識の場は「私（主）」と、私が見て聞いて触れる「感覚世界（客）」が展開する場である。

そしてもう一つの別の場は「物質の場」である。そこでは物質（モノ）が生まれ滅し、また、重力や電磁力といった物質間にはたらく「力」が作用する。この物質存在の場と、物質にはたらく力が生起する場を、ここでは便宜上まとめて物質の場と呼ぶことにする。物質の場は一切の物理現象を包括する概念である。

現代の科学は電力や磁力のように物質にはたらく力を場の概念によって説明するが、後述するように、二〇世紀以降に発展した量子物理学の理論は、力だけでなく、素粒子のような極微の物質存在も、場の概念によって説明する（量子場の理論）。古代ギリシアの哲学者デモクリトスは原子（アトム）と空虚（ヴォイド）によってこの物質世界を基礎付けようとしたが、現代の多くの物理学者は物質世界を構成するアトムとヴォイドは、双方共に場という基本的枠組みによって説明可能であると考えている<sup>※</sup>。

これら二つの場（意識場と物質場）の活動が密接に関係しているのは、客観的事実と主観的事実の双方を照合することによって確認される。例えば、意識場の中に赤というクオリア、バラの香りというクオリアが生じたとき、そこには、それに相関する生物学的レベルの物質場の活動（つまり、神経細胞群の活動）がある。もし、そのような神経細胞群のはたらきが失われることになれば、相応するクオリア（赤い色やバラの香りなど）も失われることになる。

---

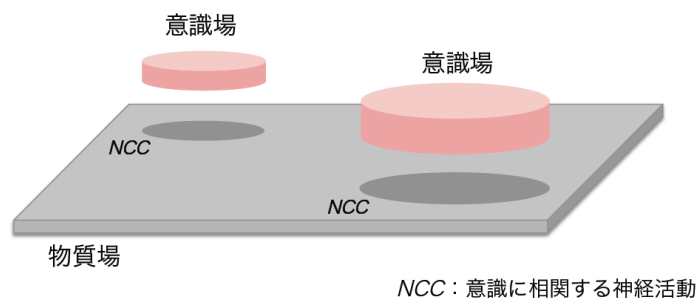
※ 物理学の基本となる「空間」「時間」「物質」「力」の四つの概念は、空間と時間の二つが「重力場」として、物質と力が「量子場」として、統合できると考えられている。

また意識内容（クオリア）だけでなく、意識そのもの（意識場）の活動も、生物学的レベルの物質場の活動（つまり、神経細胞群の活動）と相関している。意識場のオン／オフ（または強／弱）といった調節は、神経細胞群の活動の状態と明白に相関している。例えば、睡眠や起床に伴う意識水準の変動は、生体内の様々な化学物質（アセチルコリン、ヒスタミンなど）や、神経組織（視床下部、前脳基部など）のはたらきと明らかに連動している。「意識」と「物質」の二つの場が密接な相関関係を保ちながら活動しているのは明白な事実である。

しかしながら、二つの場は存在論的には全く別ものように見える。（クオリアを生む）意識の場は主観的・私私的・一人称的な存在概念であるのに対し、（粒子や力を生む）物質の場は客観的・公共的・三人称的な存在概念である。高次の「想」の機能（つまり、論理的思考力）によって把捉された物質の場の中には、赤い色のクオリアは無く、バラの香りのクオリアも無く、喜びも無く、悲しみも無く、憂いも無く、愛も無い。自己の感覚などは物質の場そのものが所有しているわけではない。他人の頭の中をのぞいて見えるのは、意識の場の活動ではなく、それと相関する物質の場の活動である。私たちが論理的に定義する物質の場そのものの中には、主観的な「知る」はたつきは存在しないし、クオリアも存在していない。「光」と「影」のダンスのように、二つの場の活動は密接な相関性を示しているが、両者は全く異質な存在概念となっている。

このような意識場と物質場の関係性を簡単に表現すれば、図8のようになるだろう。物質場の特定のレベルの活動（主として生理学的、神経生物学的な活動）が意識場の活動に相関している。今日の脳科学の知見によれば、神経ネットワークの活動が意識場の活動に密接に相関している。ただし、存在論的には意識場は物質場の中に位置付けることはできない。意識場と物質場は存在論的には分離している。図8に示すように、物質場と意識場は交差することのない平行場として描写される。光と影のように、意識場の

図8 意識場と物質場



活動と物質場の活動は密接な相関性を示すが、基本的には性質の異なる二元論的な場となっている。

私たちが経験的に知っているのは、地球という物質場の範囲には、人間の数だけ（あるいは生物の数だけ）独立した意識場が存在しているということである。そして、世間的にいうところの人間の生死というものは、この意識場の生滅であると理解してよい。物質場の活動に相関して、独立した意識場がそこかしこで生まれては滅している。

唯物論のような「物質一元論」は、図8で示されるような意識場の存在を無視しているか、もしくは、意識場と物質場のそれぞれの固有の性質を認めながらも、将来的には意識場を物質場の中に吸収することが可能（存在論的に還元可能）であると信じている世界観である。実際には意識場を物質場の中に存在論的に還元することは（今のところ）できないので、そのような試みはハード・プロブレム（難しい問題）として理解されている。基本的には今日のサイエンスは哲学的な難問であるハード・プロブレムを抱えながらも、この物質一元論の枠組みの中で、世界の仕組みを理解しようとしている。